

強い日差しが石畳を塗り分ける。色濃い影は、まるでペンキを塗ったようにくっきりと日陰と日向を塗り分けていた。

「ああっいいー……」

地球（マンホーム）よりも太陽から離れていて、その分日の光も弱まっているらしいのだが、そんなことが信じられないほどの暑さだった。

少女はふと空を見上げ、額の汗をぬぐった。街の上空。そこには、巨大な島が浮かんでいる。

「いくら手動運転（マニユアル）だからってムラがありすぎよお……」

中空に浮かび、ひしめく家々を冠したその島は『浮き島』と呼ばれている。その役目は気温の調整。頂上に建造された巨大な施設が、絶えず膨大な熱量を地表に放っているのだ。そのお陰で、太陽から得られる熱が少ないこの星でも、地球のような環境が再現されている。

しかし浮き島の出力調整は、すべて手動によって行われている。そのためムラが生じてしまい、毎年この街にも酷暑や残寒が訪れるのだ。

ふと、その気候調整装置の管理をしている青年の顔が浮かんだ。

「それ」が、根拠のない自信に溢れた小憎らしいいつもの顔で笑い始めると、いよいよもって彼女の衝動は抑えきれなくなる。

「ボニ男のヘタクソーツ！ ちゃんと仕事しろーツ!!」

夏の暑い昼下がり。出歩く人もいない小道（カッレ）に彼女の叫びは反響し、濃い夏の空しく吸い込まれていった。

がくりと、肩ごと首をうなだれる。

（あー 叫んだら余計暑くなってきた…… そもそも何であんな暑苦しい顔思い浮かべないといけないのよ……）

少女、藍華（あいか）はげんなりしながらも、日陰を辿って再び

歩き出した。

火星が水に包まれてから百五十年。「アクア」と呼び名を変えたこの星では、多くの人々が自国の文化村を築いていた。ここはその中の一つ。海面に沈んでしまったイタリアのヴェネツィアがベースとなったネオ・ヴェネツィア。水路が走る街中で、人々はゴンドラを使って生活している。車の乗り入れが禁止されたこの街において、ゴンドラはなくてはならないものである。

そんなネオ・ヴェネツィアはオリジナルの街と同様に、観光業も盛んである。かつては男性の舟乗り（ゴンドリエーレ）が観光案内業を営んでいたが、この街ではその役目を女性が担っている。水先案内人（ウンディーネ）と呼ばれ、彼女らは多くの人々が憧れる花形の職業だ。藍華は、そんな花形に憧れる水先案内人のタマゴの一人だった。

小道から、水路に沿った少し大きな通りに出た。水面を走る涼しい風が彼女の顔を撫でていく。一瞬の涼に、彼女は胸いっぱいひんやりとした空気を吸い込んだ。

「あ、やっぱり藍華さんだ」

と、不意に届いた声に思わず深呼吸が止まった。少年のようなテノールだが落ち着きを含んだ声。それは聞き慣れた、しかし予想外の声だった。

ゆっくりと目を開く。

果たして、彼女を見上げるように一人の少年が微笑んでいた。

「ア、アルくん!？」

「はい。奇遇ですね」

アルと呼ばれた彼、アルバート・ピットは、黒いマントに丸いサングラスといういつもの格好でそこにいた。背丈は藍華の肩ほどまでしかないのだが、実は彼女よりも年上の青年だったりする。彼は地重管理人（ノーム）と呼ばれる仕事に就いており、普段は地下で